



Title	大島本源氏物語の本文 : 『源氏物語大成』底本の問題点
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1988, 3, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67249">https://doi.org/10.18910/67249</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 大島本源氏物語の本文

『源氏物語大成』底本の問題点一

伊井春樹

## 一大島本源氏物語の意義

鎌倉中期に藤原定家によって校訂された源氏物語の青表紙本が、室町中期以降流布本となり、今日まで不動の地位を占めているのは異論の無いところで、今後もよほど素性の明らかな拙いの古写本が出現しない限りは、この状態が続くはずである。とりわけ現代の研究においては、池田亀鑑博士による『校異源氏物語』（昭和十七年刊）と、『源氏物語大成』（昭和二十八年—三一年）の出現による影響が大きく、ここで底本に青表紙本が用いられたことは、その後のテキストの方向をほぼ決めてしまった感がする。池田博士による膨大な量の諸本調査（冊数にして一万五千冊という）と、多数の協力者、それに出版者との共同によって完成された『校異』ないし『大成』は、源氏物語の本文研究においては空前絶後と言つてもよく、以後それを凌駕する諸本の系統論や本文研究はなく、将来も容易なことではないであろう。

池田博士が用いた青表紙本は大島本（現在は古代学協会蔵）

で、世間に一般に知られるようになったのは昭和五、六年頃といふ。大正十二年三月に芳賀博士記念会が発足し、池田博士を中心とする源氏物語の古注釈を含めた注釈作業が始められるが、本文研究の方が重要と、途中から方針が変更された。昭和六年には『校異源氏物語』の前身となる校本の第一次稿が、翌七年にはほぼ完成していたとされる。ところが、その底本に用いられていたのは河内本であった。河内本を中心とし、青表紙本と別本による校異が付されるという体裁だったのであろう。その校本の完成とほぼ時期を同じくして大島本が佐渡から出現したわけで、すぐれた本文と知った池田博士は、急遽底本の変更を決断し、十年後になつてやつと『校異源氏物語』ができるが、いたつたのである。研究者の良心といつてもよく、それはまた本文研究にかけた池田博士の執念でもあった。このようにして、多分に偶然性によるのだが、大島本が青表紙本のオーソドックスな本文としての価値も持つにいたつたのである。ただ、当初の作業のまま底本が河内本であったとする、その後源氏物語の本文はどのような展開になつていたのだろうかと、時に不

思議な因縁も思わずにはいられない。

きわめておく必要があろう。

このようないきさつによって、大島本が『源氏物語大成』の底本となつて以降現代までの、古典全書（朝日新聞社）・『源氏物語全訳』（松尾聰）・『源氏物語評訳』（玉上琢彌）・古典全集（小学館）・古典集成（新潮社）といった主な注釈書は、いずれもそれを継承しており、すぐれた本文であることは勿論ながら、今さらながら『大成』の存在の大きさも思う次第である。ただ、古典全書以下の本文は注釈書用に手を加えたり、他本で校合した校訂本文となつており、そこから大島本の復元は不可能で、その忠実な翻刻は『大成』だけというのが現状である。そのため、より正確と思われる青表紙本の本文を引用するとなると、今のところは『大成』の本文をそのまま借りるしか方途はない。

大島本の伝来等については別に述べるつもりだが、現在の姿は大内政弘の求めによって飛鳥井雅康が文明十三年（一四八一）に全巻を書写し、その後吉見正頼に伝えられ、そこで桐壺と夢浮橋巻は道増・道澄の書写本で差し替えられるとともに、兼良

筆良鎮本で注記や本文の書き入れ・校合が全面的になされるに至る。正頼は、同じく政弘を通じて良鎮旧蔵本を手に入れ、その行間・余白等の注記を、いわゆる大島本に転記していった。その折、良鎮本以外の伝本も用いたと思われるが、本文の校訂もしているのである。このように、大島本は雅康筆とはいえ、正頼によって手の加えられた本文であるという性格を、まず見

大島本が『校異源氏物語』『源氏物語大成』の底本に採用され、「本文ハ誤謬ト認メラルモノニ至ルマデ、ステ原本ノマトシタ」（同「凡例」）とする唯一の翻刻文として、今日も広く用いられていることは喋々するまでもなかろう。このような長大な作品になると、「ステ原本ノママ」とはいえ、ある程度のミスは不可避ではあるが、ただほほ忠実な青表紙本として人々が用いている現状からは、一文字であっても誤りが存しては困るのである。大成本が出現して以降大島本の研究はほとんどなされず、複製本も出されていないため、現状では翻刻本文がなれば無批判に継承されてきた嫌いがある。本稿では源氏物語本文研究の一環として、たまたま大島本を調査する機会を得たので、大成本の誤植等を中心には指摘しておきたい。大島本に見られる、ミセケチや異本の書き入れ・校合の問題点、さらに雅康が初めに依拠した本文の性格等については別の機会に考察したい。

## 二 『源氏物語大成』の誤植

大島本（浮舟巻を欠く五十三帖）が『源氏物語大成』の底本となつていているのは四十七帖、省略した六帖の理由は、花散里・柏木・早蕨には原本である定家筆本が別に伝来し、桐壺・夢浮

橋はすでに述べた道増・道澄による後の補写であり、初音は別本の本文のためである。以下、巻別に列挙していくが、大成本における誤読は勿論のこと、単純な誤植とか、仮名遣いにいたるまで指摘しておくことにする。上段に『大成』の本文と頁・行数、下段には大島本の該当する部分だけを引用し、その丁数を示した。

(帚木)

一 さるへきこと、おほえて (四〇四) 一 さるへくこと  
とおほえて (八ウ)  
「校異」にも、別本の項に「さるへきこと、おほえて」とするので、そのように読んだようだが、大島本は明らかに「さるへく」とする。明融本は「さるへき事と」とあるので、大島本の誤写であろう。なお、大成本の「こと、」とするオドリ字は、大島本では「ことと」とある。

(夕顔)

二 らうのかたへおはするに (一一〇二) 一 おわするに  
(一四〇)  
三 つといたきてああ君いきいて給へ (一二五六) 一 あ  
か君 (三三〇)  
四 ふともゝのものはれ給はす (一一七六) 一 ふともゝ  
のいはれ給はす (三六〇)  
五 けさはたに、おち入あとなん (一三一11) 一 おち入  
ぬとなん (四一ウ)

二は「は」と「わ」の違いで、大成本の方が正しいものの、大島本とは異なる。三「ああ君」、五「おち入あ」はたんなる誤植で、校異では正しい語句となっている。しかし、巻末の「補正」には指摘されていない。四是大島本の「もの言はれたまはず」が、大成本では「ものも言はれたまはず」と「も」が補われる。校異でも「ふともゝのも」とするので、大島本の本文としていたようだが、どうしてこのような誤りが生じたのかは不明。『評釈』では「『も』は感動強意の助詞」と説明し、小學館版でも「も」を継承するものの、新潮版は原本の大島本と一致しており、「も」を持たない。これなども、大成本の誤りが後世の本文や注釈にまで影響してしまった例であろう。

(若紫)

六 うけ給はへるもの (一六五六) 一 うけ給はるもの  
を (一九ウ)

七 ことさらおさなくかきなし給へるも (一七九八) 一  
おさなノ、かきなし (三八〇)

八 荒ましう (一八三七) 一 あらましう (四三〇)

九 風ふきあるるに (一八三四) 一 あるゝに (四三〇)  
一〇 まゐりきつるそ (一九〇三) 一 まいりきつるそ (五  
一ウ)

六の「うけ給はる」を、大成本では「うけ給はべる」と誤る。小學館版・新潮版では大島本と一致するが、『評釈』では「底本『うけ給はへる』活用語尾『はり』脱」として「うけたまは

りはべる」と本文を校訂する。『評訣』での「底本」というのは、大島本ではなく誤読した大成本を指すのであろうか。もし、そうだとすると、大成本で誤って「へ」を入れたため、『評訣』ではさらに誤って「はり」の脱としたことになる。七の「おさなく」は、大島本では明らかに「おさな／＼」と「く」ではなく

「オドリ字」である。いすれの注釈書も「く」とする。「おさなく」でも意味が通じはするものの、「おさなおさな」の方がいかにもあどけなさの残る表現ではないだらうか。八は、大島本の「あらましう」の傍注に「荒」と記されているのを、大成では目移りによって底本ではなく漢字の方を本文に採用したのであろう。九はオドリ字を仮名に直し、一〇は底本の「い」を正しい「ゐ」に訂正した例。これなど、「ゐ」が正しくとも原本通りに「い」とすべきで、校訂者がうっかり慣れた歴史的仮名遣いに翻字してしまったのであろう。

(末摘花)

一一 いまはぬさちはくる人も(一一〇九) あさち(一)

(二ウ)

一二 からうしてわなゝかしいてたり(一二九四) かし

うして(二六〇)

一 一 は「ぬ」と「あ」の誤植。二 一 は、大島本では「かしうして」とし、二文字目の「し」の傍らに「ライ」と記す。異本との校合で、大成本では校異においても大島本の各所に見られる「イ」とする本文は取り上げていない。ところが、大成本の

校異では「カル(ら)うして大」とし、「ル」の文字がミセケチにより「ら」と訂正されていることを指摘する。しかし、この「ら」は異本との校合を傍記しているだけで、訂正をしていわけではない。

(紅葉賀)

一三 ことにふれてしるけるは(二四四三) しるければ(二二オ)

一四 心なけにいはけてきこゆるは(二五三六) いわけ

て(二四オ)

一五 そうそくありさまいと花やかに(二五四二) さう

そく(二六〇)

一三の大成本「しるけるは」は誤り、諸注釈書においては大島本の「しるければ」を採る。『評訣』では「『源氏物語大成』『けるは』は誤植か」とする。一四・一五ともに仮名遣いの誤りで、翻字する折、底本を離れてうっかり正しい歴史的用法に従つたのであろう。

(賢木)

一六 女かたも心あはたゝしく(三三四三) いと心あは

たゝしく(二ウ)

一七 御手はいとおかしう(三五七八) 一御ては(三三三〇)

一八 いとゆるらかにうちすしたるを(三六二六) いと

ゆるゝかに(三九〇)

一九 みすしあけさせ給いて(三六三三) みつし(四一)

オ)

一一〇 思給へらるゝこそ (三六七七) — 思給はらるゝ (四

五ウ)

一一一 春宮の御世を (三七〇四) — 東宮 (五〇オ)

一一二 またひらかぬみすしとも (三七二四) — みつし (五

オ)

一二三 うちそうときて (三七四五) — さうときて (五四オ)

大成における大島本の翻刻の方法は、訂正されたり補入され

た本文を採用することにある。一六の大島本の「いと」はその  
補入の例だが、大成本では本文に取り入れていないし、校異に  
も指摘がないのは見落としのためか。諸注釈においても「いと」  
を入れて解釈していない。一七・一九・二一・二二・二三は、  
いずれも用字や仮名遣いの誤りである。ただ、底本には「みづ  
し」とありながら大成本では「みずし」とし、「さうときて」  
を「そうどきて」と、現代仮名遣いにしてしまっている例もあ  
る。一八は「ゆるゝか」と明らかにオドリ字だが、大成本では  
「ら」と読む。『評釈』・小学館版では「ゆるらか」とし、新  
潮版は「ゆるるか」とする。

(須磨)

一二四 いみしうおほへ給へは (三九五三) — おほえ給へは

(二オ)

一二五 たいめなくてやとおほすは (四〇七七) — たいめな  
くやと (一七オ)

二四是大成本で「え」を「へ」とした誤り、また二五は大成  
本で「なくてや」と「て」を挿入した例。しかし、諸注釈書で  
はいずれも「て」を入れて解釈する。大島本とは異なるので、  
これは大成本に引かれた結果であろうか。

(澤標)

二五六 すこしあはきかたによりぬるは (五〇三〇) — あわ  
きかた (二九オ)

(蓬生)

二七〇 御そうそくなと (五二八七) — さうそく (一四オ)

二八〇 むかへになむまるりきたる (五二九二) — まいり (一五オ)

大成本では、二八のよう歴史的仮名遣いに訂正（底本通り

のはずなので、違いがあつてはならないのだが）する一方では、  
二七のよう現代表記にするなど、混乱がみられるようである。  
(絵合)

二九〇 御すしともひらかせ給て (五六二一四) — 御つし (九  
オ)

(松風)

三〇〇 よろすにかなし (五八二一) — よろつに (六オ)

三一〇 契ことにおほせ給へは (五八五〇) — おほえ給へは  
(一〇ウ)

大成本では「つ」を「す」とし、「え」を「せ」と誤る。と  
くに、三一の「え」は、現代の「え」にほとんど近い字形で、

これを「せ」と読んだ事情は不明。諸注釈書ではいずれも「え」の本文とする。

(薄雲)

三二 さすかにたちいてへ (六〇四三) 一たちいて (二一  
ウ)

三三 ありさまをもさゝ給へと (六〇五七) 一きゝ給へと  
(四ウ)

三四 ひくもいみしうおほへて (六〇七三) 一おほえて  
(八オ)

三二一は大島本に「いてて」とあるのを、大成本で「いてへ」とオドリ字にした例。三三は誤植のようで、校異では「きゝ」とする。

(朝顔)

三五 きこえいたし給へり (六四二一六) 一いたし給へる  
(六オ)

三六 ひとことときこゆれば (六四九三) 一ひとことへ  
(一六ウ)

(少女)

三七 そぞくものうちあはす (六七〇四) 一さうそく  
(七ウ)

三八 みにそへても (六七八四) 一身にそへても (一七ウ)

三八は大島本の「身」を、仮名にひらいた例。大成本では、原則として身体的な意味を持つ「身」はそのまま漢字を用いて

いるようだが、必ずしも確立してはいなかつたようで、両用が各所に混在している。以下の巻にも見いだされるが、この例によつて代表させる。

(玉鬘)

三九 にけいてにしをいかに思らんと (七二九〇) 一いか  
に思ふらんと (一五ウ)

四〇 こゝにてしくはへなとするほとにひくれぬ (七三二一  
四) 一日くれぬ (一九オ)

四一 みしまえにおふるみくりの (七四五八) 一みしま江  
に (三七オ)

三九は「ふ」の脱落、四〇は「日」を「ひ」とし、四一では「江」を「え」とする。「日」にしても「江」にしても、大成本ではもとの漢字を用いないで仮名にしているが、これが原則だったわけではない。三八のように混在の状態にある。

(野分)

四二 をむなへしのかさみなとやうの (八七〇一) 一むみ  
なへし (一一オ)

(若菜上)

四三 風にたゝよふ春のあは雪 (一〇六五二) 一あわ雪  
(五一オ)

四四 いのちもえたふましかめる (一〇九三一六) 一たふま  
しかんめる (八八ウ)

四三は「あは」を「あわ」と誤つて翻字する。四四の大島本

の「ん」は補入、大成本ではそれを採用していない。

(夕霧)

四五 ひとつにみたれてえむあるほとなれは（一三一七四）  
一えむあるほとなれと（一二オ）

四六 おしみかほにもひこしろい給はねは（一三三一三）  
一ひこしろひ（三〇オ）

四七 おもたまへたゆみたりし程に（一三四一三）  
おもたまへたゆみたりし程に（一三四一三）  
うたまへ（四一ウ）

四八 おもたまへらむけしきも（一三五二九）  
一おもうた  
まへらむ（五六オ）

四九 わたりたまで少將の君を（一三五八三）  
一わたりた  
まうて（六四オ）

五〇 よろつおもたまへわかれす（一三五九七）  
一おもう  
たまへわかれす（六四ウ）

五一 ひとつしかせたまで（一三六〇一）  
一ひとつしかせ  
たまうて（六五ウ）

五二 かくおもたまへなりぬるを（一三六一二）  
一かくお  
もうたまへ（六七オ）

五三 なすらへたまですてつるみと（一三六八六）  
一なす  
らへたまうて（七六オ）

五四 おひいてたまける（一三七五一）  
一おひいてたま  
ける（八五ウ）

四五 なすらへたまですてつるみと（一三六八六）  
一なす  
らへたまうて（七六オ）

五二 かくおもたまへなりぬるを（一三六一二）  
一かくお  
もうたまへ（六七オ）

五三 なすらへたまですてつるみと（一三六八六）  
一なす  
らへたまうて（七六オ）

五四 おひいてたまける（一三七五一）  
一おひいてたま  
ける（八五ウ）

四五 なすらへたまですてつるみと（一三六八六）  
一なす  
らへたまうて（七六オ）

五四 おひいてたまける（一三七五一）  
一おひいてたま  
ける（八五ウ）

四五 なすらへたまですてつるみと（一三六八六）  
一なす  
らへたまうて（七六オ）

四五 なすらへたまですてつるみと（一三六八六）  
一なす  
らへたまうて（七六オ）

れは」と誤る。ところが、大島本を底本としたと凡例に記す諸注釈書は、何の指摘もなくいすれも「なれば」で解釈する。このような例など、他本による校訂であれば、その旨を注記すべきであろう。四七以下は、大島本に朱で「ウ」と傍書するが、補入すべてを本文に採る大成本では一切無視する。大島本でウ音便を後筆で指摘するのは、後の宿木に一例見い出すのと、この巻だけである。

(幻)

五五 もからきぬも（一四一五八）  
一裳からきぬぬ（一六  
ウ）

(椎本)

五六 くろきあはせひとかさね（一五八一六）  
一くろきあ  
わせ（四六オ）

(総角)

五七 さやうなるためしなくやは（一五九〇四）  
一きやう  
なる（五オ）

(宿木)

五八 さやなる御けはひにはあらぬ（一七二三三）  
一さや  
うなる（三一ウ）

五九 あいなく心つかいいたくせられて（一七三七六）  
一心つかひ（四七ウ）

六〇 花やかにおほしをこりて（一七七一一）  
一おほしお  
こりて（九五オ）

六一 いときよらにそあるやとほめいたり（一七八四八）

一ほめるたり（一一一ウ）

五八は、大島本に「さやなる」に「ウ」と傍記するものの、大成本では底本に取り上げず、校異に「さやウなる大」と指摘するにとどまる。以下は、他の巻にも見られた「ひ」を「い」、「お」を「を」、「る」を「い」とし誤って翻字している例である。

（東屋）

六二 いとらうたけにる給へるに（一八〇五九）一いとら

うたけにおかしけにてる給へるに（一七〇）

六三 北おもいにいたり（一八〇八一）一るたり（二〇ウ）

六四 かの中ひとにはかられて（一八〇八八）一かの中人

に（一一オ）

六五 ちいさきいゑまうけたりけり（一八三五八）一ちひ

さきいゑ（五五ウ）

六六 はやりかならましはしもかたしろ（一八五一2）一

はやかりならましはしも（ミセケチにし、「かはイ」

と傍記）かたしろ（七五ウ）

六一は、大成本では底本に記されている「おかしけにて」の語を脱落している。そのため河内本・別本の校異で「らうたけ

に一らうたけにをかしけにて河」「らうたけに一らうたけにを

かしけにて御宮保図国」とするのは不必要となる。『評計』では、これまでそうだが大成本を継承した上で、「いとらうたけに」とはすでに述べたように大島本ではあり得なく、大成本を指しているようである。すると、筆者は大島本を直接見て本文を定めたのではなく、誤脱した大成本の本文によったと考えられ、さらにそれに手を加えるという新たな異文を作り出しているといえる。小学館版は「をかしけにて」を補い、頭注でこの語句を持たない本が多いと指摘し、新潮社版では「いとらうたげにてるたまへるに」と、『評計』と同じ本文とする。東屋巻は明融筆ではないが、つれの写本では大島本と同じく「おかしけにて」の語句を持つ。

六六は、大島本では「はしも」をミセケチにしているものの、大成本ではそれを無視して本文化する。大島本は、「はやりかならまし」と切る本文にしたはずで、異文として墨筆によつて「かは」と傍記したのである。『評計』では「はやりかならましかばしも」とし、「ならましかば 底本『ならましは』。青表紙諸本による。河内本も同じ。たたじ別本は異同が多いが、「か」のない本が多い」とし、小学館版・新潮社版もこれを継承する。

（蜻蛉）

六七 いみののこりもすくなくなりぬ（一九五二3）一い

みのこりも（二七ウ）

六八 われをゝろかなりと思って（一九五三3）一われをゝ

ろかに思て（二九〇）

六八は、大島本では「、（を）ろかに」とあるのを、どうい  
うわけか大成本では「、（を）ろかなりと」と語句を補ってい  
る。別本の校異でも「、（ヲ）ろかなりと」をろかなると官国  
一おろかなりなど保」などとするので、底本に「なりと」とあ  
つたとの判断である。しかし、大島本にはこのような語句はど  
こにも見いだすことはできなく、大成本の明らかな誤りと言わ  
ざるを得ない。『評釈』では、大成本を用いて「われをおろか  
なり、と思ひて」とし、大島本とは異なる。新潮社版も「おろ  
かなりと」を継承し、小学館版は「おろかに」とする。ただ、  
明融本のつれの写本では「おろかなりと」とある。

これまで示したのが、大成本における大島本との違いだが、  
膨大な量のうちのわざかにこれだけの誤りなので、ほぼ忠実な  
翻刻文として利用することができるだろう。しかし、それでも  
やはり見過ごすことのできない翻刻の違いもあり、それが後の  
注釈に影響を与えていいるのではないかと思われる点もある。そ  
れと、すでに指摘したように、「日」「江」「身」「裳」など、  
漢字で表記されているにもかかわらず、大成本ではこれを仮名  
に直して翻字しているのはどのような事情なのか、たんなる音  
を借りた文字ではないだけに理解できない。これは「見」につ  
いても言えることで、この場合は原則としてすべて「み」と仮  
名にしたようである。「見たてまつりてましと」（桐壺）とか  
「見ざらましかば」（同）などでも、「み」とする。しかし、

視覚的な意義がある変体仮名の「見」は、やはり元の字体を尊重して翻字すべきであろう。かといって、「見」は「み」と徹していいるわけでもなく、時に「見しり給らむと」（葵）などあるのは、むしろ誤りなのであろうか。これは底本の「身」も同じで、身体的な意味であっても「み」と「身」の両様に翻字される。

### 三 初音卷の性格

これは別の機会にまとめたく思うが、大島本のミセケチ・補入とかの扱いについて、大成本では朱筆・墨筆のいずれも訂正された本文を底本として採用する。この書き入れは、雅康自身がした例もあるだろうし、初めにも述べたように正頼の筆もあるはずで、その本文を用いたために、大成本の本文が他の青表紙本からは離れてしまった現象も時には起っている。とはい  
うものの、訂正以前の本文は明らかに誤写もあり、どの時点を正当と認めるのは困難なことである。その訂正本文に関して問題のあるのは初音卷で、これは大島本の中では別本として大成本には採用されなかつた。この初音卷の本文が、大成本では他  
の巻とかなり異なつた扱われ方をしているのである。

一 御方ノノの御まへのありさまともまねひたてんも

（七六三<sub>5</sub>・一〇）

この本文について、大島本では右に引いたように「御まへの」

「とも」の語句を持ち、これは別本特有の表現のようである。この限りにおいて、確かに大島本は別本の本文を継承している

と判断できる。だだこれには、傍線を付した部分の文字が、ミセケチなどではなく真中から墨によって線が引かれ、削除されているのである。その指定通りに除いて読むと青表紙本と一致してき、別本とは言えなくなる。雅康が依拠した本文は別本であつたにしても、校合して訂正した本文は明らかに青表紙本になつてゐるのだから、そのような扱いにすべきなのではないだらうか。

これまでにも述べたように、初音巻以外の巻々では、もとの本文が河内本や別本であつたにしても、朱や墨によって訂正したり補入した本文を大成本の底本とし、青表紙の校異の部分ではその旨を指摘していた。いわば大成本の底本の定め方の原則は、本文の書写者である雅康の所為か後人の所為かは問わず、ともかく新たに書き入れられた本文を採用することであった。そのため、大成本の底本は他の青表紙諸本と多く共通する本文となつたわけだが、しかし一方では本来の大島本そのものからは距離を持つようになつたのである。その大成本の方針は、現実的な処理として妥当であるし、誤写の訂正もかなり多いのを無視してまで初めに写した本文を再現すべきだとは思わない。

しかし、その一貫していたはずの方針がこの初音巻ではまったく適用されず、補訂以前の本文を尊重するという態度に変更されてゐるのである。それは別本であるため、底本には採用しな

かつたことと関係するのだろうが、やや無原則な感じがしないではない。

大成本では、初めに「本巻ノ大島本（飛鳥井雅康筆）ハ青表紙本デハナク別本デアルカラ、之ヲ底本トセズ、池田本ヲ底本トシタ」とし、別本である初音巻は底本にできなかつた旨を述べる。本来ならば訂正された本文を底本とし、他の巻と同じようくどの語句が消されたり加えられているのか校異で指摘すべきであろうが、当初から全体が別本と分かっているからには、それまでの方針とは異なつても仕方がなかつたとは言えるだろう。このようにして、大島本の初音巻は底本の地位から別本校異の一隅へ押しやられたのだが、しかしその校異の欄においても、大島本に訂正のあることは一切触れられず、訂正される以前の本文が青表紙本とどのように違つてゐるかが指摘されるだけである。このような次第で、ここでは初音巻の書き入れと大成本で漏らした語句等について、それは後人が校合に用いた本文の性格ともかかわるのだが、以下指摘しておきたい。

二　さうすく有さまよりはしめて（七六三九・一ウ）  
三　めやすく（補入）もてつけてこゝかしこにむれるつ  
　　、（七六三九・一ウ）

四　いはひ事かな（補入）みなをの／＼思ふ事の（七六  
　　三四・二オ）  
五　わらひ給へる御あり（補入）さまを（補入）年のは  
　　しめの（七六四一・二オ）

- 六 かゝみの影にもかたらひはんへりつれ (七六四2・二オ)
- 七 契はかりきこえ (補入) かはし給ふ (七六五14・四ウ)
- 八 火おけにしゝうを (補入) くゆらかして (七六七13・六ウ)
- 九 さうかちなどに (補入) もさえ (ミセケチにして「れ」と傍書) めやすく (七六八1・六ウ)
- 一〇 あはれな (補入) るふることゝも (七六八3・七オ)
- 一一 こゑまちて (ミセケチにして「出」と傍書) たるなと (七六八5・七オ)
- 一二 かうしもあるましき夜ふかさそかしと (七六八13・七ウ)
- 一三 はたなき (ミセケチにして「ま」と傍書) けやけしと (七六八14・七ウ)
- 一四 今日はりび (ミセケチにして「む」と傍書) しかくの事に (七六九4・八オ)
- 一五 おもふ心などの (ミセケチ) 物し給ひて (七六九10・八ウ)
- 一六 かうのゝしる車のをとも (七七〇2・九オ)
- 一七 物へたてて (補入) きゝ給ふ御方々は (七七〇2・九オ)
- 一八 日かす (ミセケチにして「ころ」と傍書) すくして
- 一九 わたり給へり (七七〇9・九ウ)
- 二〇 かさねのうちき (ミセケチにして「きぬ」と傍書) なとは (七七一1・一〇ウ)
- 二一 御そと (補入) もの事 (補入) なと (七七一8・一〇ウ)
- 二二 さる (補入) へきおり／＼はうち忘れ (七七二12・一ウ)
- 二三 緺 (補入) 仏の御かさりはかなくしたる (七七二11・一二オ)
- 二四 思給へしられ侍 (補入) けるときこゆ (七七三4・一二ウ)
- 二五 一本 (ミセケチ) もふと (補入) たのむと (ミセケチ) のたまふ (七七三6・一三ウ)
- 二六 さまノゝあ (補入) まねくなつかしく (七七四3・一四オ)
- 二七 かねて御せうそともありければ (七七四9・一四ウ)
- 二八 無にも (補入) かきとゝかたからむこそ (七七五6・一五オ)
- 二九 露のなか (ミセケチにして「うち」と傍書) と見へわたさる (七七五8・一五ウ)

三〇 さるはかうこむ（ミセケチ）しのよはなれ（七七五

9・一五ウ）

三一 一本かうさしのいともよはなれ（ミセケチ）たるさ

ま（七七五9・一五ウ）

三二 御方ノヽえ（ミセケチ）かへりわたり（補入）給ひ

ぬ（補入）はす（ミセケチ）（七七五12・一六〇）

以上が、大成本には指摘されていない大島本初音卷の訂正箇所で、大半の書き入れは底本の別本を青表紙本によって校合した結果である。青表紙本との違いをすべてチェックしていったところでは、まだ多く残されているが、これは用いた本文の性格もあつたであろうし、校訂者の見落としも予想される。

さて、大成本では後補の書き入れは一切採用することなく、削除したり補入する以前の大島本の本文と、底本とした池田本との違いだけを校異に指摘していった。しかし、それもゆれがあるようでは、校異漏れを見いだすことができる。四では、「かな」を補入する以前の大島本は「いはひ事ともみな云々」とあつたはずだが、校異では指摘がなく、むしろ「とも一大ナシ」と、存在する語句を「ナシ」とする。これは原則からはずれているのではなく、単純な見誤りであろうか。

音便やささいな違いを無視した例として、二の「さうすく」は「さうそく」と同一と見なしているようであるし、六は青表紙本と同じ「はんへりつれ」とあるにもかかわらず、校異では「侍れ別」としかない。一二の「かうしも」は「かくしも」、

一六の「かう」は「かく」、二七の「御せうそこ」は「御せうそく」と同じ語句として処理される。

これ以外は、三のよう「めやすく」が補入されていても、校異では「めやすく一ナシ大保」といったように、あくまでも訂正以前の本文を基準とする。これまで述べたように、他の卷の処理と方針がなぜか異なっているのである。そうかと思うと、一七をとりあげると、ここでは「て」が補入されているためもとの本文は「物へたてき、給ふ」とあつたはずだが、校異では指摘がなく、本来から「物へたてき、給ふ」とあつたことになっているなど、杜撰な面も見られる。校訂に用いた本文は、多くは池田本と一致して特定できないが、二〇の「御そものな」とは底本などと共通しながら、わざわざ「御そもの事など」と書き入れており、この本文は肖柏本と重なる。正頼前後の流布本が用いられたようで、これは他の卷についても調査を進めていけば、ある程度の系統が判明するかも知れない。そうなってくると、校訂された本文を純正な青表紙本として利用するのは問題だが、これらについては煩雑になるので別の機会に考察したい。

付記 一本稿は、昭和六十二年度文部省科学研究費一般Cによる成果の一部である。なお、調査にあたっては藤本孝一氏のお世話をなったことを記し、ここに深謝申し上の次第である。

web公開に際し、画像は省略しました